

# 「生命の気づきから尊さを育む保育」の創造

A Study on a Preschool Teaching Method for the Discovery of the Value of Plant and Animal Life

野 口 伐 名

Isaaki Noguchi

## I 問題の所在～幼児の「<sup>いのち</sup>生命の気づきから尊さを育む保育」を創造するために

本稿の目的は、幼児期における「<sup>いのち</sup>生命の気づきから尊さを育む保育」の創造と言う研究テーマのもとに、今、日本において喫緊の保育の研究課題となっている保育園保育の幼児の「生命の保育」を、どのようにして創造すれば良いのか、具体的実践的に究明することにある。本稿の研究テーマとなっている『「生命の気づきから尊さを育む保育」の創造』の創造は、私が共同研究者の一人になっている青森県五所川原市保育連合会の、そして主として五所川原市長橋保育園の吉田純子主任保育士が、平成15年9月10～12日、京都で開催された平成15年度第47回全国保育研究大会において口頭発表した「生命の気づきから尊さを育む保育の創造」から由来している。約3年間の長きに亘る「生命の気づきから尊さを育む保育の創造」に関わる保育の実践研究が、この口頭発表のみで終わってしまうのは極めて残念であるとの思いと願いから、本稿は、この吉田純子主任保育士が口頭発表した「生命の気づきから尊さを育む保育の創造」（以下において、「生命の保育」或いは「生命の保育の創造」と略称することがある。）をもとに、共同研究者の一人である私が、この吉田純子主任保育士の口頭発表「生命の保育の創造」を更に世に問う形で、主として次の三つの保育課題に焦点をしばって小論文文化したものである。

①「生命の気づきから尊さを認識する」幼児の発達の流れと節目の究明

②幼児の「生命の尊さを育む」ために、保育上の「働きかけ」としての計画的な環境構成と幼児の活動（遊び・課題活動）に伴う援助の在り方の究明

③保育園保育の「広がりを求め」る異年齢交流保育と子育て支援（家庭との連携）の究明

これらの三つの保育課題から容易に推測されるように、本稿では、「生命の保育」の創造に関わる保育方法の究明にその主眼が置かれているが、本来の我々の研究課題には、つまり吉田純子主任保育士が口頭発表した「生命の気づきから尊さを育む保育の創造」では、この「生命の気づきから尊さを育む」保育方法の究明と共にもう一つの大きな保育の実践研究の主眼である「生命の気づきから尊さを育む」保育計画・指導計画の作成の在り方の究明が考察されており、極めて優れた研究成果を挙げている。しかしながら、本稿では、後の「II 保育実践の研究課題と方法と内容」において、ごく簡単に触れてはいるが、極めて残念なことにこの「生命の保育の創造」に関わる保育計画・指導計画の作成の在り方の究明に関する部分の内容全体については、紙幅の関係から割愛されている。

我々がこの日本の喫緊の保育課題となっている『「生命の気づきから尊さを育む保育」の創造』を研究テーマに設定した最も大きな理由は、基底的には、幼児保育において「平和の心の芽」を培う保育活動として、「生命への愛をもたせ」、「生命への畏敬」を培う「生命の保育」が必要不可欠であると考えているからである。何故なら、「あらゆる生きとし生ける物に生命力がある」ことを実感させ体得させる幼児の「生命の保育」は、「あらゆる生きとし生ける」生命あるものの中からしか学ぶことができないからである。そして現実的には、児童虐待、いじめ自殺など、いとも簡単に掛け替えのない生命を軽視して短絡的に殺人にいたる今や現代の日本の風潮、それは「モラルハザード」とさえも言えるような何とも痛ましい事件の多発も、我々が幼児期における「生命の保育」の創造の研究に取り組む

大きな動機となっている。我々が、この保育研究の実践事例において主に3歳以上児と異年齢交流保育（縦割り保育・混合保育）の保育活動の場として、地域社会の「自然に恵まれた環境を生かし」、特に動植物との関わりに重点をおいて幼児の「生命の気づきから生命の尊さを育む保育」の研究実践を進め考察を試みている大きな理由もここにあり、五所川原市の豊かな自然環境を保育の場に取り入れる大きな理由の一つにもなっている。子ども（幼児）も親も保育士も共に育ち合い、「あらゆる生きとし生ける物」の生命の尊厳から平和を愛する人間として成長し発達することを願っているからである。

これらの問題意識と先の三つの保育課題のもとに、この保育の実践研究においては、幼児保育士協働型保育における幼児の「生命の気づきから尊さを育む保育」の創造の究明に、次の三つの研究課題を設定して考察を試みている。その第一は、幼児の発達の視点から、幼児の「生命の気づきから尊さを認識する」発達の流れとその節目を究明することである。より具体的には、最も身近な自然環境の中で展開される幼児の主体的な遊び（活動）を通して、幼児の成長の姿（遊び・活動）から幼児の発達の流れと節目を見出しながら、幼児の「生命の気づきから尊さ」がどのようにして培われていくのか、その保育の指導過程を明らかにすることである。第二の問題は、幼児保育士協働型保育における保育方法の視点から、幼児の「生命の尊さの認識を育む」ために、保育士の「働きかけ」としての計画的な環境構成と乳幼児の活動（遊び）に伴う援助の在り方の究明である。これらの保育士の「働きかけ」としての計画的な環境構成と幼児の活動（遊び）に伴う援助の在り方については、生命ある自然、即ちここでは紙幅の関係から、植物はタンポポを、動物ではカエルを取り上げて、幼児の主体的な動植物への関わり（遊び・活動）に見られる幼児の進歩的に変容する姿（遊び・活動）から、保育士の新しい「働きかけ」の在り方について探ろうとしていることである。第三の問題は、この幼児期における「生命の保育」の創造に関わる保育の実践研究の、平成15年度第47回全国保育研究大会における「口頭発表」後の継続研究の成果の報告である。この「生命の保育」の創造に関わるその後の継続研究は、平成15年度第47回全国保育研究大会における保育実践研究の五所川原市保育連合会保育研究実行委員会委員長である津軽野保育園の水島和子主任保育士と口頭発表者である長橋保育園の吉田純子主任保育士が、私と共同研究しながら更に保育研究を進めその成果をそれぞれまとめたものである。それは、水島和子主任保育士の「生命の保育」を創造するために、生命の「気づき」から「認識」へ、そして生命の認識から「尊さ」の認識へと発展する保育過程と、そして吉田純子主任保育士の「生命の尊さを育む保育」を創造するために生命に「気づく」触れ合いの保育、生命への愛着心を培う深め合いの保育、そして生命への振り返りの保育の発達過程とその保育方法の在り方について考察を進めるものである。更には第四の問題として、保育園保育における「たくましく生きる力を育む保育の広がり」を求めて、異年齢交流保育と子育て支援（家庭との連携）などを取り上げていることである。これからの保育園保育は、親や家庭、そして地域社会などの幼児が育つ生活基盤そのものにも目を向け、家庭養育を単に補完するだけでなく、保育園保育の「広がり」を求めて、家庭や地域社会と密接に連携し支援しなければならないからである。最後にこの研究方法の特徴について付言すると、自然に恵まれた地域社会環境を生かした幼児の活動（遊び）を重視しながら、幼児の発達の進歩的な変容の理解を深め認識するために、1500事例にも及ぶ保育観察を重視し、幼児理解の客観性を保障するために常にカンファレンス（省察）を導入して研究を進めていることである。

## II 保育実践の研究課題と方法と内容

最初に、この保育の実践研究の「ねらい」と研究方法及び研究内容について簡単に述べておきたい。この論考では、幼児の『生命の気づきから尊さを育む保育』を創造するために、関連的には3歳未満児のそれをも研究対象として研究の視野には入れているが、3歳以上児の新しい保育の在り方を考えるために、主として「3歳以上児（異年齢交流保育）」を対象として、「生命の気づきから生命の尊

さを育む保育」の実践研究を進め考察を試みている。そして保育所保育指針を踏まえながら「自然に恵まれた環境を生かした、特に動植物との関わり」に重点をおいて、保育園保育の「生命の保育」の在り方について究明している。

### 1. 保育実践研究の「ねらい」

この研究の「ねらい」は、研究テーマである「生命の保育の創造」のもとに、保育士主導型保育か幼児主導型保育かの保育形態（方法）のあり方や家庭との連携などの保育の現状を把握しながら、主として3歳以上児（異年齢交流保育）の子育て支援（家庭との連携）をも視野に入れた幼児保育士協働型保育による新しい保育の在り方について追究することにある。それは、動植物との関わりの中で幼児の発達のプロセスを究明しながら、保育士の「働きかけ」としての計画的な環境構成と援助、更には異年齢交流保育と子育て支援（家庭との連携）などの視点から、今日的な幼児保育士協働型保育の在り方としての「生命の気づきから尊さを育む保育」をどのように創造していくべきか、具体的に明らかにすることである。

### 2. 保育実践の研究手法

我々が研究方法として導入した保育観察、保育計画・指導計画の作成、保育実践のより具体的な研究の着眼点は、次のようになっている。（1）保育観察では、①身近な植物・動物に関わる幼児の発達過程、②幼児の発達の期間別特徴と年齢別特徴、③幼児の発達の流れと節目に着目しながら1500事例の観察を試みて、これら①②③の研究課題を明らかにする。（2）保育計画・指導計画では、①身近な植物・動物に関わる幼児の発達過程、②保育士の「働きかけ」としての計画的な環境構成と援助、③異年齢交流保育と子育て支援（家庭との連携）の視点から究明する。（3）保育実践では、①保育士の「働きかけ」としての計画的な環境構成、②保育士の「働きかけ」としての計画的な援助、③異年齢交流保育と子育て支援（家庭との連携）などの視点から究明する。なおそれぞれの分析、考察に当たっては、できるだけ客観性を保つために、幼児の感性・遊びの展開・知的好奇心の三つの視点からカンファレンス（省察）を取り入れて究明している。

### 3. 保育実践の研究内容

保育研究の具体的な内容は、次のようになっている。

- （1）幼児は、最も身近な自然環境である植物（花・草・葉）や動物（アリ・トンボ・カエル）と触れ合う主体的な遊びの中で生命の気づきから尊さが培われている。
- （2）幼児の発達の流れと姿（遊び・活動）については、保育観察とカンファレンス（省察）により生命の気づきから尊さへと育まれる幼児の姿（遊び・活動）を考察し、幼児の発達の流れと節目を見いだしている。
- （3）幼児保育士協働型の保育の在り方を探ると同時に、あくまでも幼児の主体性を大切にしたい保育士の働きかけとなる環境構成と援助の在り方について、更に異年齢交流保育と子育て支援（家庭との連携）の在り方について幼児の発達過程に即した保育計画・指導計画の作成の在り方について考察を試みている。

## Ⅲ 幼児の「生命の気づきから尊さを認識する」発達の流れと節目の究明

本節での研究課題は、幼児の発達の視点から保育園保育における、幼児の「生命の尊さを育む」以前のより重要な根本的な問題として、幼児が「生命」の存在と尊厳を認識するにいたるその発達の流れとその節目について究明することである。それではどのようにして幼児は、「あらゆる生きとし生ける物」の生命に気づき生命の尊さを認識し育んでいくのであろうか。この幼児の「生命の認識」の問題を究明するために、保育研究の観点として、最も身近な保育の場としての自然環境の中で展開される幼児の主体的な保育活動（遊び・課題活動）を大切にしたい「保育観察とカンファレンス（省察）」

と、この保育観察から見える幼児の発達の「期間別特徴と年齢別特徴」に着目しながら、幼児の「生命の認識」にいたる「発達の流れとその節目」の二つの問題を設定してアプローチするものである。

## 1. 保育観察とカンファレンス（省察）とその研究成果

### （1）保育観察の導入

幼児の「生命の認識」の問題を究明するために、先ず第一にそのアプローチの方法として、幼児の主体的な保育活動（遊び・課題活動）を大切にしたい保育観察を導入したのは、大きく次の三つの仮説（理由）によっている。

- ①一年を通しての幼児の進歩的に変容する成長の姿（遊び・活動）から「生命の気づきから尊さを育む」際のその保育過程を明らかにすることができる。
- ②身近な保育の場としての自然環境の中で、身近な植物・動物に関わる幼児の発達過程の流れに即した姿（遊び・活動）から、幼児の「生命の気づきから尊さを認識する」発達の流れと節目を究明することができる。
- ③保育観察は、幼児の「生命の気づきから尊さを育む」保育計画・指導計画を作成するための基礎的作業でもある。

とは言っても、保育観察を導入した最も大きな「ねらい」は、最も身近な保育の場としての自然環境の中で展開される幼児の主体的な保育活動（遊び・課題活動）を、保育士が直接観察することができるからである。

### （2）保育観察の対象

保育観察の対象としては、身近な生命ある植物としてタンポポを、そして同じく身近な生命ある動物としてカエルを取り上げている。この保育観察の対象として、植物からタンポポを、そして動物からカエルを取り上げた理由は、平成9年度以来保育観察を進めてきているが、平成13年度の保育観察事例1500の集計結果として、幼児の自由で好きな、そして主体的な遊びにおける最も身近な上位三つの「生命ある自然」の一つであるからである。ちなみに「生命ある自然」のベスト3は、植物においては、花（タンポポ）、草、葉の順で、動物においては、アリ、トンボ、カエルの順である。これら「生命ある自然」として挙げられた6種類の動植物は、五所川原市という豊かな自然環境に恵まれた地域性にもとづいてはいるが、幼児にとっては自由で好きな、しかも主体的に遊びを楽しめる身近な素材から教材となるもので、幼児の自由で好きな、しかも主体的な遊びを引き出す最も身近な自然環境「生命ある自然」となっている。この保育の実践研究では、これら6種類の動植物について分析し考察を試みているが、この研究報告では、紙幅の関係で、植物は花（タンポポ）を、動物ではカエルの二つの動植物のみしか取り上げることができなかったのは極めて残念なことである。

### （3）カンファレンス（省察）の導入と実際

とかく保育士の主観的観察に陥り易い保育観察の分析・考察に当たっては、その客観性を保つために、感性・遊びの展開・知的好奇心の三つの視点からカンファレンス（省察）を取り入れていることは先に触れた通りである。

保育観察の分析・考察に当たって導入された、カンファレンス（省察）の実際については、「実践事例 生命ある植物・花（タンポポ）との関わり（5歳児）」と「実践事例 生命ある動物・カエルとの関わり（4歳児）」から、それがどのようにして行われたのか見てみることにしたい。この二つの「実践事例」においては、感性・遊びの展開・知的好奇心のみでなく、生命の気づきから尊さを育む保育の創造、異年齢交流保育、子育て支援などの視点からも行われているが、ここでは感性・遊びの展開・知的好奇心などについては、後の「Ⅳ」の「3. 保育実践の研究成果」において、そして異年齢交流保育、子育て支援などについては、「Ⅴ」の「4. 保育実践の研究成果」において考察を試みているので、ここでは「生命の気づきから尊さを育む保育の創造」の視点からのカンファ

レンス（省察）の実際についてのみ見ることにしたい。これは、「生命ある動植物に関しては関心が高い」5歳児H男を対象とした事例研究である。

テーマ 「生命の気づきから尊さを育む保育の創造」

実践事例 生命ある植物・花（タンポポ）との関わり（5歳児）

はじめに 対象児5歳児H男は、3世代家族で、3人姉弟の第二子（長男）である。また、H男は、りんご畑を主とした専業農家をしている家庭環境から、りんご畑にはよく出かけ、祖母や父母が農作業しているそばで遊んだり、お手伝いをして、りんごのふらん病を見つけることができるなど、生命ある動植物に関しては関心が高い。

ねらい・タンポポとの関わりを通して、異年齢児交流の中で共感する喜びを味わい、思いやりやいたわりの心を育み、生命の尊さに気づく。

・一人一人の思いを受容し、保育士との信頼関係の中で自分の考えをありのまま表すことができるようにする。

この5歳児H男の、「生命の気づきから尊さを育む保育の創造」の視点からの、「タンポポとの関わりにおけるカンファレンス」は、次の通りである。

「幼児は、自己表出できるような温かい雰囲気の中で、たっぷりと遊び込んだ後タンポポを捨てるという行為もあるが、投げ捨てられたタンポポをかわいそうだという思いから水の入ったコップに入れることで、タンポポが咲いたりしおれるなどの様子を発見し驚いている。幼児は、タンポポの持つ教育力からもっと知りたい・試してみたいという知的好奇心や不思議さに対する保育士の応答的な関わりにより、保育士は幼児のタンポポの生命をよみがえらせてあげたいという意欲を培うことができる。」

#### （4）保育観察とカンファレンス（省察）の成果

これら生命ある自然「タンポポ」と「カエル」の幼児の一年間の保育観察とカンファレンス（省察）を通して明らかになったことは、幼児の発達の「期間別特徴と年齢別特徴」及び幼児の「生命の認識」における「発達の流れとその節目」の存在が見えてきたことである。そこで、次の「2.」においてこの保育観察とカンファレンス（省察）から見える幼児の発達の「期間別特徴と年齢別特徴」に着目しながら、幼児の「生命の認識」における「発達の流れとその節目」の問題について考察を加えて見ることにしたい。

#### 2. 「生命の認識」における発達の「期間別特徴」と「発達の流れとその節目」

ここに言う幼児の「生命の認識」における発達の「期間別特徴」は、幼児の横断的な発達の期間別特徴と呼んでも良いものである。その意味では、後に考察する幼児の「生命の認識」における発達の年齢別特徴は、幼児の縦断的な発達の年齢別特徴と言っても良いであろう。発達の「期間別特徴」と言う時の発達の「期間」とは、幼児の一年間を通した発達の流れと成長の姿を、発達の節目の観点から便宜上、1期（4～5月）、2期（6～8月）、3期（9～11月）、4期（12～3月）などの4期に分けて、幼児の「生命の認識」における「期間別」の発達の流れと節目を探ろうとしたものである。この幼児の「生命の認識」における「期間別」の発達の流れと節目について、幼児の「生命の気づきから尊さを育む」際に、生命ある自然としての「タンポポ」と「カエル」を通して、幼児の一年間の保育観察とカンファレンス（省察）を通して明らかになったことは、幼児は、1期（4～5月）では、発達の節目としての「生命との出会い」（発達の節目）、2期（6～8月）は「生命との触れ合い」（発達の節目）、3期（9～11月）は「生命への深め合い」（発達の節目）、そして4期（12～3月）では「生命の振り返り」（発達の節目）などの四つの発達の流れと節目を辿って成長していくことである。そこで1期（4～5月）から4期（12～3月）の発達の節目に着目しながら、幼児の「生命の認識」

の発達における期間別特徴について考察を試みることにしたい。幼児が「生命の気づきから尊さを認識」するには、身近な保育の場としての自然環境の中で、「生命ある自然」である植物（花・草・葉）や動物（アリ・トンボ・カエル）との「出会い」が必要不可欠である。本来ならば、「花・草・葉」、「アリ・トンボ・カエル」の全てを取り上げるべきであるが、ここでは紙幅の関係で、植物（花・草・葉）では「花」の「タンポポ」のみを取り上げている。

#### （１）１期（４～５月）～「生命との出会い」（４歳児：興味・関心・感動）

幼児は、１期（４～５月）の春に、「生命ある自然」である「タンポポ」に次のように「出会う」。

- ・直接体験（興味・関心・感動）としての出会い

Ｙちゃん（４歳児）は、「先生、お花きれいだね。いい匂いがするよ」と言って大喜び。Ｙちゃんはお花に「もっと大きくなるんだよ、タンポポさん」と話し掛ける（思いやり）。

- ・生命の尊さ（アニミズム）としての出会い

Ｙちゃん（４歳児）がお花を摘んでくれたので、「机の上においてくれる?」と言うと「うん。」と言って部屋の方に行った。すると２～３分たってから来て、「先生、お花喉が渇いて死にそうになってるよ、お花がお水欲しいって言ってるよ。早くあげて」と言う。

このようにタンポポの花が一斉に咲きほころぶ様子を見て、「お花きれいだね。いい匂いがするよ」と言って喜んでいる幼児（４歳児）の姿が見られる。ここにはタンポポの花（植物）に興味や関心を抱き始め、幼児の「生命との出会い」がある。

#### （２）２期（６～８月）～「生命との触れ合い」（３歳児：発見・驚き）

幼児は、２期（６～８月）の夏に、「生命ある自然」である「タンポポ」と次のように「触れ合う」。

- ・綿毛と種を別々にして「ゴマみたい」と見せ、取った種を土の中に埋める。摘んだ花を洗い、水を飲ませようとしている。つぼみの花に対し、「赤ちゃんだもん」と言ってむやみに摘まずに残している姿が見られる。

このように２期（６～８月）の夏では、タンポポの綿毛の種を見つけると「ゴマみたい」と言って保育士に見せる幼児の姿が見られる。ここにはタンポポの綿毛の種（植物）の発見や驚き、幼児の「生命との触れ合い」がある。

#### （３）３期（９～１１月）～「生命への深め合い」（３歳児：面白さ・不思議さ）

幼児は、３期（９～１１月）の秋に、「生命ある自然」である「タンポポ」と次のように「生命」の「深め合い」を行う。

- ・暑い日だったので、花に水を飲ませようとしたのか、手洗いと同時に摘んできた花も洗っている。
- ・野に咲く草花の摘んで良いもの、悪いものを考えながら見ているようで、つぼみがついているものは残している。Ｋ君に聞くと「赤ちゃんだもん」と言う。

このように３期（９～１１月）の秋では、暑い日に咲いているタンポポを見つけ、手洗い場でその摘んできたタンポポのお花に水を飲ませようとして洗っている幼児の姿が見られる。ここにはタンポポのお花の面白さや不思議さなど、幼児の「生命への深め合い」がある。

#### （４）４期（１２～３月）～「生命の振り返り」（３歳児：生命のつながり）

幼児は、４期（１２～３月）の冬に、「生命ある自然」である「タンポポ」と次のように「生命の振り返り」をする。

- ・雪の下になったプランターを見て「雪の下には何かあるのかな。」とスコップで雪を払う。土が少し見えると「お花が咲いていないんだぁ」と少し残念そうにし、また、雪をかけている。
- ・雪の下のタンポポの葉を見つけ、「草、生きているね。すごいね」と感心している。

このように４期（１２～３月）である冬には、幼児が雪を払い、「お花が咲いていないんだぁ」と言い、幼児が雪の下のタンポポの葉を見つけ、「草生きているね。すごいね」と感心している姿から幼児なりにタンポポの生命とのつながりを感じ取り、これまでの「触れ合い」によって、深め合ったタン

ポポとの遊び体験を通して「生命の振り返り」をしている姿が見られる。

以上の考察から、幼児の「生命の認識」の発達の流れと節目の姿には、その幼児の「生命の認識」における横断的な発達の期間別特徴として、幼児の生命に対する1期(4～5月)の「生命との出会い」(発達の節目)、2期(6～8月)の「生命との触れ合い」(発達の節目)、3期(9～11月)の「生命への深め合い」(発達の節目)、そして4期(12～3月)の「生命の振り返り」(発達の節目)と四つの発達の流れと節目があることが理解される。

### 3. 「生命の認識」における発達の「年齢別特徴」と「発達の流れとその節目」

幼児の生命の認識における横断的な発達の期間別特徴と「その発達の流れとその節目」との関連を究明するために、ここでは幼児の「生命の認識」における縦断的な発達の「年齢別特徴」と「発達の流れとその節目」について、即ち、研究主題である幼児の「生命の気づきから尊さを育む」際に必要不可欠である乳児や幼児の7年間を通した保育園在園期間の「発達の流れと節目(成長発達)」の姿を探っている。なお「年齢別特徴」と言う時の発達の「年齢」とは、0歳児から6歳児までを指している。その結果として、乳幼児の生命の認識における「年齢別」の発達の流れと節目について、乳児や幼児の1年間の生命ある自然としての「タンポポ」と「カエル」の保育観察とカンファレンス(省察)を通して明らかになったことは、0～2歳児では、「生命あるものへのいたずら(遊び・探索)」、3歳児では「生命の気づき」、4歳児では「生命への思いやり」、5歳児では「生命へのいたわり」、そして6歳児では「生命の尊さ」と言う五つの発達段階を辿っていることである。「生命の認識」の発達の年齢別特徴(発達の流れと節目)について、具体的に考察を試みると、次のようになっている。なおここでは紙幅の関係から「カエル」のみを取り上げることにしたい。

#### (1) 0～2歳児～「生命あるものへのいたずら(遊び・探索活動)」

乳児や幼児は、0～2歳児の時期に、「生命ある自然」である「カエル」に、「砂や葉っぱをちぎってかけたり水を入れたりしながら、カエルの様子をじっと見ている。カエルを足で踏み付けるが「かわいそう」になったようで草の中に隠す(2歳児)」などの「いたずら(遊び・探索)」を始める。

このように0～2歳児の時期に、カエルに水や砂、葉っぱをちぎってかけるなど、乳幼児なりに「生命あるものへのいたずら(いたずら遊び・探索活動)」をしている姿が見られる。0歳児の時期は、動くものに興味をもって触ろうとするし、1歳児では、保育士の手に乗っているカエルをつついたり、カエルを手で握り潰したり、ポイと投げたり、カエルをこわごわ触ったり、片手を差し伸べるが怖くなり泣いてしまう姿が見られる。

#### (2) 3歳児～「生命の気づき」

幼児は、3歳児の時期に、「生命ある自然」である「カエル」の「生命」に、次のように「気づき」始める。

- ・花壇にたくさんカエルがいて、毎日のように捕まえているが、殺してしまうことはなく、部屋に入るときには捕まえた場所に戻し、「バイバイ」と手を振っている。
- ・カエルをつかんだり足を伸ばせるだけ伸ばして遊んだり、友達と競争してカエルを取り合うが、保育室に入るときには捕まえた場所に戻す。
- ・カエルが跳ねると「すごい!跳ねた」と驚き、触ると「冷たいね」「やわらかいね」と体感し、友達から欲しいカエルをもらおうと嬉しそうに両手で包むように園に持ち帰る。

このように3歳児の時期には、カエルを捕まえた場所に戻し、「バイバイ」と手を振るなど、3歳児なりに「生命の気づき」(発達の節目)を認識している。なお水槽や飼育ケースのオタマジャクシやカエルからも「生命の気づき」は、0歳児では、水槽の中に入っているオタマジャクシを捕まえようとしているが、3歳児では、カエルの飼育ケースを手で叩き動く様子を見ている、飼育ケースのフタを外し逃げ出すカエルを見て喜んでいる、などのように保育観察とカンファレンス(省察)がなされている。

### （３）４歳児～「生命への思いやり」

幼児は、４歳児の時期に「生命ある自然」である「カエル」の「生命への思いやり」が、次のように保育観察されカンファレンス（省察）されている。

- ・ やっと捕まえた一匹のカエルを他児が強く握り締めてしまい、ぐったりして動かなくなったのを見て「カエルくん K 君のせいで動かなくなってしまった。かわいそうに、かわいそうに」と何度も繰り返す言う。
- ・ カエルに「ハエあげる」と言い、必死でハエを捕まえようとする。
- ・ カエルの冬眠の紙芝居を見た後、友達と一緒に雪の上を歩き、「カエルさん、ずーっとお昼寝なんだよね」と話しながら、生態知識からの共感を求める姿が見られる。

このように４歳児では、「カエルくん、K 君のせいで動かなくなってしまった。かわいそうに、かわいそうに」と言って、「カエル」の「生命への思いやり」を示している。

### （４）５歳児～「生命へのいたわり」

幼児は、５歳児の時期に「生命ある自然」である「カエル」に対する「生命へのいたわり」が、次のように、保育観察されカンファレンス（省察）されている。

- ・ カエルをつかみ、「大丈夫だよ、優しく持てばいいんだよ」と捕まえられなかった友達に見せる。
- ・ 「カエルをあじさいのお家に逃がそう。あじさいのお家に逃がすと、前に逃がしたカエルもいるしね。それに赤ちゃん産むかも」とワクワクしている。
- ・ 花壇にいたカエルをみんなでかわいがって触れるが、帰るとき持ち帰りたいと言う。
- ・ カエルを見つけると「カエルは水が好きだから」と言って、ペットボトルに水を入れ、カエルにかける。
- ・ オタマジャクシを何度も触りしっぽがとれる。世話係になると喜び、触り方も優しくなる。カエルを水に入れて観察したり、捕まえたカエルを用水路の水たまりに逃がす。

このように５歳児の時期には、カエルを捕まえられなかった友達に「大丈夫だよ。優しく持てばいいんだよ」と言っていることから知れるように、「カエル」への「生命のいたわり」を示している。

### （５）６歳児～「生命の尊さ」

幼児は、６歳児の時期に「生命ある自然」である「カエル」に対する「生命の尊さ」を認識するようになり、次のように保育観察されカンファレンス（省察）されている。

- ・ カエルを見つけると、ペットボトルに水を入れ、「暑いからかわいそう」と水をかけてあげる。
- ・ カエルの手や足を引っ張って遊ぶが、友達にかわいそうだからやめてと言われてもやめず、しかし、カエルがぐったりすると、「ごめんね」と言って逃がしてあげる。

このように６歳児の時期には、「暑いからかわいそう」とカエルに水をかけてあげる活動が見られる。６歳児は、「カエル」への「生命の尊さ」を認識しているのである。

乳幼児の「生命の認識」に対する幼児の発達の縦断的な年齢別特徴（流れと節目）には、０～２歳児のカエルに水や砂、葉っぱをちぎってかけるなど、乳児や幼児の「生命あるものへのいたづら（遊び・探索活動）」、３歳児の「生命の気づき」から４歳児の「生命への思いやり」、５歳児の「生命へのいたわり」が育まれ、６歳児になると「生命の尊さ」が培われていくことが理解されるのである。

## Ⅳ 保育士の「働きかけ」—計画的な環境構成と幼児の活動に伴う援助の究明—

### １．保育研究の目的

この保育士の「働きかけ」の在り方の究明については、生命ある自然、即ちここでは植物はタンポポを、動物ではカエルを取り上げて、幼児の主體的な動植物への関わり（遊び）に見られる幼児の進歩的に変容する発達の姿（遊び・活動）から、保育士の「働きかけ」の在り方、即ち保育園における

幼児の「生命の気づきから尊さを育む」保育を創造する上での計画的な環境構成と幼児の活動に伴う援助の方法について探ることを試みている。

## 2. 保育実践の研究内容

保育士の「働きかけ」としての計画的な環境構成と幼児の活動に伴う援助の在り方について、「感性の育成」、「遊びの展開」、そして「知的好奇心の誘発」などの視点から考察を進めている。その具体的な研究内容については、「3. 保育実践の研究成果」においても関連的に言及しているので、ここでは、紙幅の関係で、「感性を培う」、そして「知的好奇心の誘発」にかかわる保育士の、この二つの「働きかけ」についての計画的な環境構成と幼児の活動に伴う援助の在り方についてのみ取り上げ考察を試みることにしたい。

### (1) 感性を培う環境構成と幼児の活動に伴う援助の在り方の実践事例

これは、幼児の感性に関わる直接体験を保障する自然環境にかかわる環境構成の問題である。

この計画的な環境構成と幼児の活動に伴う援助における保育士の「働きかけ」の在り方について、紙幅の関係で「感性」及び「遊びの展開」については植物はタンポポを、そして「知的好奇心」に関しては「カエル」との関わりを取り上げている。この保育研究の実践事例は、幼児の感性に視点を当てた植物タンポポとの関わりの5歳児H男の姿から「生命の気づきから尊さを育む」保育の、計画的な環境構成と幼児の活動に伴う援助の在り方を究明したものである。それは次のように展開されている。

#### <保育の実践>「生命の気づきから尊さを育む」 タンポポ 4・5歳児（感性）

##### 【計画的な環境構成】

この事例では、五所川原市の恵まれた自然環境を生かし、タンポポが一面に咲き広がる野原へ異年齢児が一緒になって出かけ、自由にのびのびとした直接体験（縦割り保育・混合保育）ができるように環境を構成している。

##### 【幼児の活動】

幼児は、野原に着くと「わー、きれい」「タンポポがいっぱい」と自然に遊び始めた。その中で、タンポポに感動した4歳児のA女は「タンポポの花踏まないでね。おっと」と自分の思いを伝えている。すると、5歳児H男は「まだ小さいのは咲かないよ。あれみたいに大きくなってから咲くんだよ」と側にいた4歳児M女に教えている。

##### 【幼児の活動に伴う援助】

保育士が、H男の個性や感性（つまり思い）を尊重する援助として「そうだね。これはまだ小さいものね。もう少ししたらタンポポが咲くから大切にしようね」とタンポポの芽を大事にするよう話しかけると、4歳児M女は「あんまり小さいから取らないよ」とタンポポを見つめながら話している。そこには生命に、気づきいたわる姿が見られる。

このような幼児の会話や姿や活動から野原に広がるタンポポに感動し、幼児が生命に気づき共感し合うと言う保育のねらいが達成されていることが理解されるのである。

### (2) 知的好奇心を誘発する環境構成と幼児の活動に伴う援助の在り方の実践事例

この計画的な環境構成は、知的好奇心の視点から、幼児と保育士、そして幼児同士の人的環境による温かい雰囲気づくりの問題である。その幼児の活動に伴う援助の重要なポイントとしては、保育士の幼児との応答的な関わりを大切にすることである。それは、幼児の気づきから尊さを育む活動の基本となる知的好奇心について、幼児が人的環境となる自己を表出できる温かい雰囲気づくりを保障するように環境構成の工夫を試みることである。これは、動物カエルに見る保育士の「働きかけ」に関わる幼児の生命への思いやりや尊さの認識を育む活動の基本となる知的好奇心に視点を当てた保育研究の実践事例である。その保育過程は、次のように展開されている。

### <保育の実践>「生命の気づきから尊さを育む」 カエル 4歳児（知的好奇心）

#### 【計画的な環境構成】

ここでは、幼児自身がオタマジャクシの成長に関わりながら自己を表出できるような温かい雰囲気づくりを保障するような環境構成の設定を試みている。

#### 【幼児の活動】

オタマジャクシの変化に気づいた幼児たちは、「先生、見てみて足でたよ」と喜んで知らせに来る。保育士は、「本当だあ、良かったね。みんなで餌あげてお世話をしたからだよ」と、幼児の発見や喜びに共感し共有している。

#### 【幼児の活動に伴う援助】

この応答的な関わりを大切にする保育士の援助によって、幼児は「やったあ」「ごはんあげたからだよね」「きりん組（5歳児）にも見せようよ」と、異年齢児にも喜びを伝える姿が見られた。一週間もすると、「先生、カエルになったよ。」と知らせに来た幼児と一緒に「わー、本当だあ」と言って喜ぶと幼児は、「かわいいよ。先生、触ってみて」と目を輝かせながら話している。

このような会話や幼児の姿（遊び・活動）から幼児との応答的な関わりを大切にする保育士の援助によって、そしてカエルの成長の喜びやかわいいと言う幼児の思いの伝え合いから、幼児は生命の尊さに気づいている。生命の尊さに気づく保育のねらいは達成されているのである。

### 3. 保育実践の研究成果

この保育の実践研究を通して明らかにされたことは、第一に、幼児の感性に関わる直接体験が可能になるような自然環境の構成、第二に、幼児の遊びの展開を充実するための物的・時間的・空間的な「ゆとり」の必要性、第三に、幼児の知的好奇心が誘発されるような雰囲気づくりなどの三つの保育条件の充足の重要且つ必要性である。この第一の保育士による計画的な環境構成は、感性の視点から幼児の直接体験を保障する自然環境の設定であり、その幼児の活動に伴う援助の重要なポイントとしては、幼児の個性や感性を尊重することである。保育士が幼児の感性に関わる直接体験を可能にする自然環境を保障する計画的な環境を構成することによって、幼児はのびのびと自然と触れ合い、初めてオタマジャクシやカエルの動きや感触に驚く幼児の姿が予想され、その時に幼児の個性や感性を尊重する援助が必要であると考えられるからである。第二の計画的な環境構成は、遊びの展開の視点から、幼児の遊びを充実する物的・時間的・空間的な「ゆとり」を保障することである。その幼児の活動に伴う基本的な援助としては、幼児の主体的な遊びを大切にするすることである。この幼児の遊びの展開を図る物的・時間的・空間的な「ゆとり」を保障することによって、カエルと一緒に飛べたり跳ねたり、水に泳がせて遊んだりして、たっぷりと触れ合いを楽しむ幼児の姿（遊び・活動）が予想され、その時にこそ保育士の幼児の主体的な遊びを大切にする援助が重要になるからである。第三の計画的な環境構成は、知的好奇心の視点から、幼児と保育士、そして幼児同士の人的環境による温かい雰囲気づくりの問題であり、その幼児の活動に伴う援助の重要なポイントとしては、保育士の幼児との応答的な関わりを大切にするすることである。知的好奇心が誘発されるような雰囲気づくりを保障することによって、「カエルのお家は小川やあじさいのお花だよ」と言う幼児の姿（遊び・活動）が予想され、保育士は幼児との応答的な関わりを大切にする援助が必要となるからである。その意味では、計画的な環境構成と幼児の活動に伴う援助としての保育士の「働きかけ」は、「生命の保育」の成否を左右する最も重要な保育充足条件であると言っても良いであろう。

## V 「保育の広がり」—異年齢交流保育と子育て支援（家庭との連携）の方法—

### 1. 保育実践研究における目的と課題設定

本節の目的は、「保育の広がり」としての異年齢交流保育と子育て支援（家庭との連携）の方法を検

討していく中で、どのようにして「生命の気づきから尊さを育む保育」を創造するか、具体的に明らかにすることにある。ここでは異年齢交流保育と子育て支援（家庭との連携）における「保育上の働きかけとなる計画的な環境構成と援助」の在り方について、保育実践の「研究の内容」と「保育の実践」及び保育実践の「研究の成果」の三つの問題について考察を試みている。

## 2. 保育実践の「研究の内容」—保育士の働きかけとなる計画的な環境構成と援助—

### (1) 異年齢交流保育の研究内容

異年齢交流保育の視点からの研究内容については、箇条書きに示すと次のように三つの内容からなっている。

- ①世話の仕方や遊び方の伝承
- ②生命の気づきや思いやりの伝え合い
- ③小さい幼児も大きい幼児も互いに意欲や興味を深め合い、優しさや思いやりを育み合う。

より具体的には①と②は、動植物との関わりの中で、世話の仕方や遊び方の伝承から生命の気づきや思いやりを伝え合えるように働きかけることである。③は、小さい幼児は、大きい幼児に憧れることで、意欲や興味を深め、大きい幼児は、小さい幼児に慕われ、信頼を寄せられることで優しさを育んでいけるような交流を図ることで、幼児は互いに意欲や興味を深め合い、やさしさや思いやりを育み合えるようにすることである。それは、異年齢児との関わりの機会を大切に捉え、交流が深まるよう温かく見守り、交流の機会を多くもつよう計画性をもって環境を整えることである。と言うのは、異年齢交流保育においては、動植物における世話の仕方や遊び方の伝承、そして生命への気づきや思いやりの伝え合い、また小さい幼児も大きい幼児も互いに意欲や興味を深め合い、やさしさや思いやりを育むような保育を展開することが重要だからである。

### (2) 子育て支援の研究内容

子育て支援の視点からの研究内容は、次のようになっている。

- ①幼児が持ち帰った動植物との関わりを通して生命への思いやりを育んでいく。
- ②幼児と一緒に動植物との関わりをもった、直接体験を楽しむ場を提供する。

より具体的には、①は、幼児が持ち帰ったカエル（卵・オタマジャクシ）は、大切な宝物であり、幼児が生命に気づく教材であることを家庭に伝え、その幼児が持ち帰ったカエルとの関わりを通して生命への思いやりを育んでいくことである。②は、幼児がカエルと関わって遊ぶ姿を写真で見せたり、水槽を親子で観察できる場所に設定し、触ったり遊んだりしながら、生態の変化を観察・体感したり、親子で触れ合うなど、幼児と一緒にカエルとの関わりをもった直接体験を楽しむ場を提供することである。何故なら、子育て支援においては、幼児が持ち帰った動植物との関わりを通して生命への思いやりを育んでいくということ、また幼児と一緒に動植物との関わりをもった直接体験を楽しむ場の提供が求められているからである。

## 3. 異年齢交流保育・子育て支援における保育の実践

ここでは、幼児の生命の気づきから尊さを育む活動となる知的好奇心に視点を当てた保育実践を挙げておきたい。

### <保育の実践> 「生命の気づきから尊さを育む」 タンポポ 4・5歳児（知的好奇心）

（環境構成） 雰囲気づくり（人的環境）<子育て支援>

（幼児の活動） 生命の気づきから尊さを育む活動

思いやりの伝え合いから、共に共感し、生命の尊さに気づく。

（援助） 幼児との応答的な関わりを大切にする。

この実践事例による保育研究の保育過程は、次のように展開されている。

### 【計画的な環境構成】

この事例では、幼児と保育士、幼児と幼児が人的環境となるような自己を表出できる温かい雰囲気づくりをするように環境構成の工夫を試みている。

#### 【幼児の活動】

4歳児 T 男がタンポポの花を摘んで遊んでいたが、何気なく捨ててしまうと、5歳児 H 男は、そのタンポポを拾い上げ、「あっ、タンポポかわいそうだ」と言い、保育園まで持ち帰ってくる。そして「先生、コップちょうだい」と言い、水を入れて玄関に飾っている。

#### 【幼児の活動に伴う援助】

この H 男の様子を見て、保育士は幼児との応答的な関わりを大切にした援助として「タンポポさん嬉しそうだね」とタンポポの気持ちになって H 男自身の優しさを伝える。そして、保育士がそのことをすぐ周りにいた幼児たちにも伝えると、H 男は4歳児 T 男に「H 君、優しいね。タンポポさん、良かったね」と言われ、嬉しそうに微笑んでいる。その時、周りにいた幼児たちも思いを同じにしようなずき生命の尊さに気づいている。さらに、降園時、H 男はしおれていたタンポポのことがずっと気になっていたの、玄関にくるとさっそくタンポポを見て、「あっ、立った。元気になった」と言って喜んでいる。

#### 【保育士の働きかけ】

その様子を、ここでも見逃さず応答的な関わりを大切にした援助として忙しそうに迎えにきた母親に、H 男の散歩での思いやりや優しさを伝えると、親子が視線を合わせて笑顔になり家庭での妹思いの H 男の様子を話し始めるなど会話が広がり始める。保育の家庭への広がりである。このように異年齢交流保育や子育て支援においても、保育士が応答的な関わりを大切にすることから、幼児の活動としての思いやりや伝え合いから共に共感し生命の尊さに気づくと言うねらいが達成されたとと言える。

### 4. 保育実践の研究成果

「保育の広がり」としての異年齢交流保育と子育て支援（家庭との連携）の方法としての研究成果は、それぞれ次の三点が挙げられるであろう。

（1）異年齢交流保育については、①いろいろな人と関わる楽しさや喜びの伝え合い、②世話の仕方や遊び方の伝承、③生命の尊厳などを学ぶ、など大切な機会となっていることである。「保育士の働きかけとなる計画的な環境構成と援助」は極めて重要なのである。

（2）子育て支援の方法については、①親子共に生命ある自然体験ができる保育の場の提供、②家庭で生命ある自然体験ができる身近な保育の情報提供。例えばお散歩マップなど。③お散歩などで拾ってきた石ころや草花など大人にとってガラクタのように見えるものは、幼児にとっては宝物である。そして、家庭の中で植物・動物を育て合う直接体験づくりを進めていくことが生命の尊さを互いに再認識し合う機会となるお散歩や直接体験は、より豊かな保育を展開していくためにも重要であることが明らかになっている。子育て支援の方法として最も重要なことは、いかに保育士が、「幼児の生命に対する大切な思いを汲み取り、その思いやりやいたわりの姿を保護者に伝え、親が子ども（幼児）の思いに共感し心の触れ合いを持てるように働きかけていくことができるか」である。その具体的な保育士の働きかけとしては、①「直接体験の場の提供として、親子一緒にタンポポとの関わりを持つようにお散歩や親子菜園などの保育参観（日）を企画」すること、②「動植物の自然に関する情報提供として、身近な自然環境が記載されたお散歩マップを配布する」こと、③「タンポポとの自然体験活動の様子をクラスだよりなどで伝えること」、などが大切であり、このような保育士の「笑顔あふれる毎日が送れるような支援をしていくことから、子ども（幼児）も親も保育士も共に育ち合い、更に共感し合う中で心の絆（信頼関係）が深まり、「子ども（幼児）も親も保育士も共に育ち合」う「思いやりの心、愛する心、感謝する心から自然の摂理に対する畏敬の念を持ち、生命の尊さを育むことができるのである」。子育て支援においても、「保育士の働きかけとなる計画的な環境構成と援助」は極めて重要なのである。

## VI 「幼児の生命の気づきから尊さを育む保育」の実践継続研究

### 1. 長橋保育園吉田純子主任保育士による保育実践継続研究

「<sup>いのち</sup>生命の尊さを育む保育」の創造 —“触れ合い”の保育から“深め合い”の保育、そして“振り返り”の保育へ—

#### 〈Ⅰ〉問題の所在

この保育の実践研究は、第一に「生命の気づき」を育む「触れ合いの保育」、第二に「生命への愛着心」を培う「深め合いの保育」、第三に「生命の尊さ」を育む「振り返りの保育」の三つの保育課題を設定して研究を進めている。これら三つの保育課題を設定した理由は、「生命の尊さを育む保育」がこれら三つの発達段階を経て発展的に展開していくと考えているからである。その研究方法としては、幼児保育士協働型保育のあり方の視点から植物・タンポポとの関わりを重点に、幼児が1年を通してどのように生命に気づき、尊さを育んでいるのか、前述の京都において口頭発表した「生命の保育」の研究成果を更に深めながら発達の流れと節目について生命の尊さを認識する発達の期間別（横断的）特徴を系統的に見出すことを試みている。

#### 〈Ⅱ〉「生命の気づき」を育む「触れ合いの保育」

「生命の尊さ」を育む上で、生命との「触れ合いの保育」がどんなに重要であるかについては、幼児が生命に気づくためには、主体的に花の姿そのものや美しさに感動する生命との「触れ合い」をもつことが重要である。それは、知的好奇心が育まれるように保育士は幼児の発見に共感することが必要不可欠であるからである。その意味では、幼児が自由に関わり、しかも身近に感じるような直接体験が可能となる環境構成と幼児の個性や感性を尊重する援助が大切である。

#### （1）「触れ合いの保育」——計画的な環境構成と幼児の活動

##### 【計画的な環境構成】

計画的な環境構成としてまず大事なことは、自然環境を構成する時には幼児が植物を身近に感じることができ、しかもタンポポと自由に関わることができる直接体験（自然環境）の場と活動を保障することである。この「直接体験」を保障することによって、幼児は自然のもつ教育力によって感性が引き出され、自然にそして主体的に遊び活動し始めるからである。幼児は、異年齢児との関わりの中で自分の視界に入ってくる黄色いタンポポの美しさに感動し、「もっと近くで見たい（興味・関心）」、「触ってみたい（好奇心）」、更には「自分のものにしたい」と欲求が沸き起こってくるのである。

##### 【幼児の活動】

幼児は、この計画的な環境構成から誘発されて、遊びの中で友達や保育士と一緒に髪飾りや首飾りなどを作って「見立て遊び」をしたり、「ごっこ遊び」などの素材としてタンポポを扱い、知的好奇心を育ませながら自由に関わっている。幼児は、主体的にたくさんタンポポを摘んでみては捨てるなどの行為（遊び）を繰り返すと、やがて花を摘みながらもつぼみだけは「赤ちゃんだもん」と言って残し、自分の思いを自己表出することで満足して生命に気づいている。幼児は、保育士や友達との関わりの中で思いやりを伝え合うことによってタンポポを身近に感じ、「あんまり小さいから取らないよ」と植物にも生命があることに気づいているのである。

#### （2）保育士の「働きかけ」——計画的な援助の必要性

保育士の「働きかけ」となる援助（保育士の出番・直接指導）について、ここでは計画的な援助のあり方として、幼児にとって身近に感じられ、自由に関われるような生命との「触れ合いの保育」に関わる最も典型的な保育実践事例を挙げて考えてみる。

### 【保育実践事例】

恵まれた自然環境を生かし、自由にのびのびと関われるような直接体験ができるように異年齢児はタンポポが一面に咲き広がる野原へ一緒になって散歩に出かけた。幼児たちは野原に着くと「わーきれい」「タンポポがいっぱい」と自然に遊び始める。その中で、タンポポの美しさに感動した4歳児のA女は「タンポポの花踏まないでね。おーととと」と自分の思い（思いやり）を周りに伝えている。すると、5歳児H男は「まだ小さいのは咲かないよ。あれみたいに大きくなってから咲くんだよ（知的好奇心）」と側にいた4歳児M女に教えている。そこで、保育士がH男の個性や感性（つまり思い）を尊重する援助として「そうだね。これはまだ小さいものね。もう少ししたらタンポポが咲くから大切にしようね」と話しかける（思いやりと知的好奇心）と、4歳児M女は、「あんまり小さいから取らないよ」とタンポポを見つめながら話している。

この保育実践事例に明らかなように生命に気づき、いたわる姿が見られていることから生命との“触れ合い”があることが分かる。身近に感じられるような、そして、自由に関われるような生命との“触れ合い”は、幼児の「あんまり小さいから取らないよ（生命の気づき）」の言葉から理解されるように個性や感性を尊重した保育士の援助によって生まれているのである。その具体的な援助の一つには、保育士や友達と共感し合い、思いやりや知的好奇心が育まれるように異年齢児との交流をもつこと、また、二つには、幼児が自由に触ったり、身近に感じることができるよう世話をするなどの課題活動を取り入れることなどである。

### （3）保育の広がり——家庭との連携

「生命の尊さ」の保育を展開する上でより重要なことは、親子が共に生命に触れ合い、知的好奇心や思いやりを育み合えるように家庭との連携を図っていくことである。それは、生命ある自然と触れ合う身近な保育の情報提供の重要性である。このことは例えば、長橋保育園ではお散歩マップを配布することによって、親がこれまで何気なく歩いていた道端にいろんな草花が咲いていることに気づかされ、「タンポポの花大きいね」とか「このお花、元気ないね」など親子の「会話が広がった」ことから理解できる。

#### 〈Ⅲ〉「生命への愛着心」を培う「深め合いの保育」

幼児が、生命ある自然・植物との関わりを通して「生命への愛着心」を培うには生命との「深め合いの保育」が重要である。なぜなら、幼児が「生命への愛着心」を培うには「ゆとり」の中で、タンポポという素材を「見立て遊び」や「ごっこ遊び」などの活動の教材として夢中になって遊び込むような触れ合いをもつことが必要不可欠であるからである。その意味で、幼児が植物を愛しく大切に思うような「ゆとり」のある計画的な環境構成と幼児の主体的な遊び（遊び込み）を大切にする援助が重要なのである。

#### （1）「深め合いの保育」——計画的な環境構成と幼児の活動

##### 【計画的な環境構成】

計画的な環境構成として重要なことは、幼児がタンポポと遊び込みができるよう物的・時間的・空間的環境となる「ゆとり」を保障することである。保育士が意図的に「ゆとり」をもつことで保育士自身の心にも「ゆとり」が生まれ、幼児は直感的にそのゆとりを感じ取り、幼児自身も自己実現としての遊びが深まっていくからである。

##### 【幼児の活動】

このような「ゆとり」ある環境構成のもとで、幼児のこれまでの「触れ合いの保育」のもとに興味や関心を持って「タンポポを摘んでは捨てるだけ」の活動から、保育士や幼児同士の「楽しい・嬉しい」と感じる関わりの中で、遊びは、「見立て遊び」や「ごっこ遊び」へと深まっていくことが分かる。咲いている花を摘もうとする幼児に「まだ取ればダメ。落ちたのだけ」と思いやりを伝え合った

り、タンポポの姿や形の変化を発見して「先生。つぼみ見て！タンポポねじりだ！」と心を動かされている。そこに、幼児は知的探究心を十分に育ませながら主体的な「ねじりタンポポ探し」の遊びを友達同士で展開し、夢中になって「遊び込む」姿が見られるようになる。

## (2) 保育士の「働きかけ」——計画的な援助の必要性

この保育士の「働きかけ」となる援助（保育士の出番・直接指導）について、ここでは計画的な援助のあり方として、夢中になって遊び込むような生命との「深め合い」と、愛しいそして大切に思うような生命との「深め合い」の最も典型的な保育実践事例を挙げて考えてみる。

### 【保育実践事例】

5歳児H男が「先生、つぼみ見て！ねじれてるよ。タンポポねじりだ！」と発見したのに対し、保育士は「すごい発見だね。よく見つけたね」と誉め共感すると、側にいた女兒たち3人も主体的にたくさんタンポポの中からねじれているつぼみを一緒になって探し始めた。そこで、保育士は幼児の主体的な遊びを大切にするよう見守る援助をしていると、幼児たちは、次から次へとタンポポねじりを見つけだし喜んでいった。ところが、女兒たちは探すことに夢中になり、知らないうちに別なタンポポを踏み潰していた。そのことに気づいた5歳児H男は元の形になるよう花びらを指でそっとまとめ、「これで、ちゃんと咲くよ」と、安心し満足げな笑顔を見せていた。保育士は、そこでもあえて言葉がけせずにそっと温かいまなざしで見守っている。すると、4歳の女兒たちは、H男の様子を見て、「H君やさしい」「ごめんね、タンポポさん」と話している。

このように、夢中になって遊び込む活動を通して植物にも生命があることに気づき、幼児の「これで、ちゃんと咲くよ（生命への愛着心）」という言葉から、そして、花を愛しく大切に思う姿から愛着心を培い、生命との「深め合い」があることが分かる。幼児の主体的な遊びを大切にする保育士の計画的な援助が重要なのである。それらを要約すると、①幼児が植物を愛しく大切に思うような主体的な活動の展開、②「思いやり」の相互作用となる感情交流の機会、③楽しい・嬉しい体験ができるような課題活動（世話をする栽培活動など）を取り入れること、などである。

## (3) 保育の広がりの場——家庭との連携

生命の尊さを認識する保育を展開する上で軽視できないことは、親子共に生命ある自然体験ができる身近な保育の場の提供の重要性である。それは、親子が共に生命に“触れ合い”、知的探究心や思いやりを育み合えるように家庭と連携を図っていくことである。長橋保育園では保育参観日に親子で植物栽培をすると、それから毎日保育園で植えた花を見るのが楽しみになり、親子共に「花をかわいく、愛しく思うようになった」という保育実践事例からもその重要性は理解できるのである。

### 〈IV〉「生命の尊さ」を育む「振り返りの保育」

「生命の尊さ」を育む上で「振り返りの保育」が重要である理由は、第一は幼児が植物を「掛け替えない存在」として認識し思いやりを育むような自己表出できる温かい「雰囲気づくり」を保障する人的環境構成と、第2に幼児なりに自然の摂理（生命のつながり）について知ること（知的探究心）ができるような、幼児との応答的な関わりを大切にする二つの援助が必要であるからである。

## (1) 「振り返りの保育」——計画的な環境構成と幼児の活動

### 【計画的な環境構成】

生命の尊さを育む保育を展開する上で、計画的な環境構成として重要なことは、幼児がいつでも観察したり、世話ができるような自己表出できる温かい「雰囲気づくり（人的環境）」を保障することである。幼児は失敗したり成功したり試行錯誤することによって幼児なりに矛盾を感じたり、しばんでいるタンポポを見つけ早く元気にならないかと心配したりするなどの葛藤体験を経ながら、保育士や幼児同士と共感することによって、生命の尊さを感じ取るしなやかな心やたくましい力を身につけて

いくのである。

#### 【幼児の活動】

この「雰囲気づくり」を保障する環境構成のもとで、幼児は思いやりや知的探究心を培いながら、花を摘もうとするが「やっぱりかわいそうだ」と自発的にやめたり、友達が花を摘もうとすると「せっかく咲いているからそのままにしておこうよ」と言うとそれに同意している幼児の姿が見られる。そして、幼児は雪の下にあるタンポポを見つけ、「草（タンポポ）生きているね。すごいね」と話したり、水を入れてお世話をしたタンポポを見て「あっ、立った。元気になった（生命の尊さ）」と喜んでいる。幼児は、タンポポの生命が掛け替えのない存在であることを知ると、「自然にあるもの」は自然の姿のままにしておこうと気づき、生命の尊さを感じているのである。

#### （２）保育士の「働きかけ」—— 計画的な援助の必要性

この保育上の「働きかけ」となる援助（保育上の出番・直接指導）について、ここでは計画的な援助のあり方として、世話を通した生命への「振り返り」と、いつでも観察できる生命への「振り返りの保育」場面の最も典型的な保育実践事例を挙げてみる。

#### 【保育実践事例】

４歳児 T 男がタンポポの花を摘んで遊んでいたが何気なく捨ててしまうと、５歳児 H 男は、そのタンポポを拾い上げ、「あっ、タンポポかわいそうだ」と言い、保育園まで持ち帰る。そして、「先生、コップ頂戴」と言い、水を入れて玄関に飾っている H 男の様子を見て保育士は幼児との応答的な関わりを大切にしたい援助として「タンポポさん嬉しそうだね」とタンポポの気持ちになって H 男自身の優しさを伝える。そして、そのことをすぐ周りにいた子ども達にも伝えたと、４歳児 T 男に「H 君、優しいね。タンポポさん、よかったね」と言われ、H 男は嬉しそうに微笑んでいた。その時、周りにいた幼児たちも思いを同じにしていこうと気づき生命の尊さに気づいている。

更に、降園時、H 男はタンポポのことがずっと気になっていたもので、玄関にくと早速タンポポを見て、「あっ、立った。元気になった」と言って喜んでいた。

このように、保育士が応答的な関わりを大切にしていることによって、幼児の「あっ、立った。元気になった（生命の尊さ）」という幼児の活動として思いやりや伝え合いから、幼児同士共に共感し、生命の尊さに気づいている姿が見られる。それは、幼児が世話を通して植物の生命の尊さに気づき、花を「掛け替えのないもの」としていたわる姿でもある。幼児の生命への「振り返りの保育」においては、幼児と共感し合いながら、応答的な関わりを大切にする保育士の援助が極めて重要なのである。その意味で、生命に気づき、生命への愛着心、生命の尊さへと発展的に発達していることから、計画的な援助として、幼児が主体的にいつでも観察したり、世話ができるような栽培などの課題活動も重要であり、更に、個と集団の中で生命に対する思いやりという共感の視点も必要である。

#### （３）保育の広がりの場—— 家庭との連携の問題

生命の尊さを育む保育を展開する上でより大切なことは、家庭の中で植物を育て合う「直接体験づくり」の推進を図ることである。親子が共に生命に触れ合い、知的探究心や思いやりを育み合えるように家庭と連携を図っていくことである。それは、幼児が母親にプレゼントしたいからと花を摘んできた時は、保育士はそれを受容し、降園の際に幼児の思いを保護者に伝えることによって、ほとんどの親は家にタンポポを持ち帰って親子一緒に花瓶に入れて、そこに元気になるタンポポの生きている姿を見て喜び合っていることから理解できる。

#### 〈Ⅴ〉保育の実践研究の成果と課題

最後に、この「生命の尊さを育む保育」の実践研究を通して明らかになった成果と課題について簡単にまとめて終わりにしたい。

## (1) 保育の研究成果

全体としての研究成果は、幼児は1年を通して、生命との「触れ合いの保育」から「生命」に「気づき」、生命との「深め合いの保育」から「生命への愛着心」を培い、生命への「振り返りの保育」から「生命の尊さを育む」ことなど、これら三つの発達段階を経て発展的に発達していくことが明らかになったことである。

生命との「触れ合いの保育」で重要なことは、自然環境の設定という計画的な環境構成として「直接体験」を保障することである。それは、触れ合いや思いやり、知的好奇心を培っていくためには、自由に植物と関わり合い、身近に感じられるよう幼児の個性や感性を尊重した保育士の援助の必要性を意味している。生命への「深め合いの保育」に関しては、計画的な環境構成として「夢中になって遊び込み」、幼児同士や保育士と一緒に「楽しい・嬉しい」と思う「ゆとり」を保障することである。そして、幼児同士が深い関わりをもち、思いやりや知的探究心を培っていくためには、「これ、なあに？」の知的探究心が育まれるよう幼児の主體的な遊びを大切にする保育士の援助が極めて重要である。生命への「振り返りの保育」については、いつでも観察したり世話ができる自然環境の設定という計画的な環境構成において自己を表出できる温かい「雰囲気づくり」を保障することである。幼児の知的探究心や思いやりを培うには、幼児同士や保育士と共感し合い、応答的な関わりを大切にする保育士の援助が大切なのである。その意味で、発達の期間別（横断的）特徴を踏まえた保育士の働きかけは、幼児の「生命の気づきから尊さを育む」極めて貴重な原体験となるものである。

## (2) 保育研究の課題

「生命の尊さを育む保育」の研究を進める中で残された保育研究課題としては、①幼児の発達理解と保育士の出番（役割）についての更なる幼児保育士協働型保育の研究、②生命の尊さを育む保育における家庭や地域との連携、③自然における体験活動と課題活動（栽培）を生かす保育の研究などである。ことに家庭の絆となっている「ぬくもりとつながり」のある人との関わりは、生命の尊さを伝え合ったり、認識し合う上で極めて重要である。幼児も大人も共に愛と信頼関係、そして知的好奇心や思いやりを培う中で生命を大切にし、平和な未来が構築されることを願って終わりにしたい。

## 2. 津軽野保育園水島和子主任保育士による保育実践継続研究

幼児期における「<sup>いのち</sup>生命の保育」の創造—生命の気づきから認識へ、そして生命の尊さへ—

### くⅠ＞ 問題の設定

この保育の実践研究は、「生命の気づき」から「生命の尊さ」を育むために、「保育の発展的なプロセス」を明らかにしたいという視点から、幼児の主體的な遊びや活動の姿を通して縦断的な発達の年齢別特徴を考察している。そこで明らかにされたことは、「生命の気づき」を育む保育は3歳児で、「生命の認識」の保育は4歳児、そして「生命の尊さ」を育む保育は5歳児において、縦断的発展的に発達していくことが導き出され、それぞれの年齢の発達段階において計画的な保育士の取り組みが重要であることである。しかしながら紙幅の関係からこの報告では、計画的な環境構成による幼児の活動と保育士の働きかけについては簡単に触れることにして、幼児の「遊びや活動の姿」の発達のプロセスを中心にして考察を試みている。更には、保育の広がりとしての家庭との連携と異年齢交流保育についても考察を試みている。

### くⅡ＞ 計画的な環境構成による幼児の遊びや活動と保育士の働きかけ

最初に、幼児の遊びや活動の姿の発達のプロセスを探る前に、計画的な環境構成による幼児の遊びや活動と生命の「気づき」、「認識」、「尊さ」などの三つの保育士の働きかけについて、簡単に触れておきたい。

#### (1) 「生命の気づき」を育む保育士の働きかけ

第一の「生命の気づき」を育む保育士の働きかけについては、豊かな自然に恵まれた、しかも自由

でのびのびとした解放感を味わえるような環境を構成している。そこでは幼児の遊びや活動として、「見たい、触りたい」という生命への自発的な関わりとなるいたずら遊び（直接体験）が予想されている。この幼児の遊びや活動における援助としては、面白さや驚きに共感する視点から個性を尊重し興味や関心を誘発する計画的な援助を試みている。

## （２）「生命の認識」を育む保育士の働きかけ

第二に「生命の認識」を育む保育士の働きかけとしては、幼児の「知りたい、試したい、調べたい」などの思いを充たすために自由に観察したり調べ合える物的文化的環境構成を試みている。その環境構成のもとに、そこに誘発される幼児の遊びや活動としては、生命への自主的な関わりとなる観察や間接体験から「なぜだろう、どうしてだろう」という知的好奇心に満ちた遊びが予想されている。その幼児の遊びや活動に関わる援助は、幼児の発見や不思議な思いに共感し、知的好奇心や探究心を誘導するような応答的な関わりを中心にしている。

## （３）「生命の尊さ」を育む保育士の働きかけ

第三に「生命の尊さ」を育む保育士の働きかけについては、自己表出できるような話し合いの場としての人的環境を構成している。それは、ぬくもりある優しい雰囲気づくりである。その環境構成から誘発される幼児の遊びや活動としては、「かわいいよ、優しくもってね」と言う生命への主体的な関わりとなる世話などが予想されている。この幼児の遊びや活動に対する計画的な援助としては、幼児の感情を受容し思いやりを伝え合うという保育士の援助で、具体的には幼児の喜びや悲しみや憤りに共感するという援助であり、生命の大切さを感じ取れるような保育の遊びや活動を誘導することである。

## （４）保育の広がりとしての保育士の働きかけ—家庭との連携—

保育士は、自然に恵まれた土手のお散歩やりんご畑などでの「生命ある小動物との触れ合い」による幼児の感動体験を、クラスだよりや家庭教育学級学習会などで、保護者に伝えることが大事である。それによって、生命の尊さを育む子育ての必要性を学び合い、保育場面での感動体験を家庭でも再現したり、小動物との関わり合いも広がっていくのである。

## （５）保育の広がりとしての保育士の働きかけ—異年齢交流保育—

保育士は、豊かな自然環境を活用した異年齢交流の保育形態を計画的な環境構成として位置づけることが必要である。なぜならば、異年齢交流による幼児同士の関わり合いによって、「カエルの卵、こうやってとるんだ」と言うように関わり方や遊び方を伝承したり、小動物の生態や成長を学び合ったり、生命あるものに対する思いやりやいたわりの伝え合い、「生命」というものを理解し認識していくからである。

### 〈Ⅲ〉「生命の気づきから認識へ、そして生命の尊さへ」—幼児の遊びや活動の姿—

保育士の生命の「気づき」、「認識」、「尊さ」など三つの働きかけによる幼児の主体的な遊びや活動の姿から、明らかにされたことは、次の通りである。

#### （１）「生命の気づき」における幼児の遊びや活動の姿

それでは、「生命に気づく」幼児の遊びや活動の姿とはどのような態度や心情、認識（知的理解）をいうのであろうか。次に具体的に考えてみたい。

##### 【１・２歳児—生命に気がついていない—】～カエルはオモチャ～

１・２歳の幼児は、カエルのことを気にせず「オモチャ」のように扱っている。この自己中心的な関わり方の姿（強く握り潰す、投げる、足で踏む）から、カエルの生命には気がついていない。

##### 【３歳児—生命に気づく—】～カエルは遊び友達～

３歳の幼児は、カエルと「遊び友達」のように関わる姿（感触を楽しむ、これ〈卵〉あのカエルなの、遊び終わるとバイバイと言って元の場所に返す）が見られる。この直接体験（触れ合い）の中でカエルは自分にとって大事なものであるという心情も育ち、生命あるものとして気づいてくることが

分かる。

【4歳児—生命の気づきから思いやりが育つ—】～カエルは仲良し友達～

4歳の幼児は、「仲良し友達」としてカエルに関わる姿（一緒に跳びはねたり鳴き声をまねて遊ぶ、かわいいとなでる、遊び終わると返してあげる、死ぬとかわいそうだと悲しむ）が見られる。かわいと思う「愛着心」やかわいそうだという「思いやり」が育まれ、カエルの生命は大切なものだという心情も育っていることが分かる。

【5歳児—生命の気づきや思いやりから尊さが育つ—】～カエルは大好きな友達～

5歳の幼児は、「大好きなお友達」としてカエルに関わる姿（みんなでかわいがって触る、優しく持てばいいんだよとつかみ方を友達へ教える、遊び終わるとあじさいの花の下や用水路の水の所に逃がす、オタマジャクシやカエルをかわいいと喜ぶ、エサ食べてるかなと心配する、暑いかからかわいそうと言って水をかけてあげる）が見られる。カエルを一生懸命世話することで、カエルの成長と共にカエルへの愛情が育まれ、掛け替えのない存在となり、カエルの生命を守るためには自然に返してあげようという愛護する心が培われ、カエルの生命の尊さを認識していることが分かる。

全体として「生命の気づき」における幼児の遊びや活動の姿は、保育士の働きかけによって「これ（卵）あのカエルなの」という幼児の言葉から分かるように、これまでの経験で獲得してきた「生命に対する自己イメージと目の物体が一致すること」を理解した時の姿である。

## （2）「生命の認識」における幼児の遊びや活動の姿

「生命を認識する」幼児の遊びや活動の姿については、幼児の態度や心情、認識（知的理解）などの発達に関わる年齢別特徴は次のように明らかにされている。

【1・2歳児—生命の存在を認識できない—】～カエルはしゃかな（魚）？～

1・2歳の幼児はオタマジャクシを「しゃかな」と言う。しかし、「魚」と言葉を発するだけであって、何も気にせず自己中心的に関わる姿（オタマジャクシの入った水槽を手で叩く、強く握り潰す、投げる、足で踏む）から、カエルの生命の存在を認識できないでいる。

【3歳児—生命を次第に認識するようになる—】～卵・オタマジャクシ・カエルは別人？～

3歳の幼児は、カエルの卵とオタマジャクシとカエルが同一の小動物であるという認識は理解できない姿（オタマジャクシを「えー、カエルになるの？ 足もないよ、カエルはみどりだよ。」「オタマジャクシ？ へんな人だねー、まあいいよ」）が見られる。それぞれ別的小動物であるという認識をもちながらも、カエルと遊んだ後、元の場所にバイバイと手を振って返してあげるという行動から、生命の存在を徐々に認識できるようになってくる。

【4歳児—生命の存在を認識できる—】～オタマジャクシはカエルの子～

4歳の幼児は、卵やオタマジャクシやカエルが同一の小動物として捉えている姿（カエルの卵はオタマジャクシになるんだ、カエルになるんだ）が見られる。まだ細やかにカエルの成長の変化を理解するには至っていないが、カエルの生命の存在を認識できるようになっている。

【5歳児—生命の存在を理解し認識できる—】～カエル・卵・オタマジャクシ・カエル～

5歳の幼児は、カエル・卵・オタマジャクシ・カエルの一連の成長の変化を捉えることができる姿（カエルは卵を産むんだよ、卵がオタマジャクシになってオタマジャクシがカエルになるんだよと幼児同士伝え合う、図鑑を見てカエルの種類に興味をもつ）が見られる。卵やオタマジャクシやカエルを同一の小動物として理解することができているのである。このようにカエルの一連の成長の変化を知っていることから、卵がオタマジャクシになってオタマジャクシがカエルになるというカエルの生命の存在を理解し認識していることが分かる。

「生命の認識」における幼児の遊びや活動の姿についてトータルに言えることは、幼児がオタマジャクシを見て「だってほら、やっぱり後ろ足だよ」という言葉が示しているように、「生命の成長の変化を知る」ことが幼児の「生命の認識」の姿なのである。

### （３）「生命の尊さ」における幼児の遊びや活動の姿

「生命の尊さ」における幼児の遊びや活動の姿については、幼児の態度や心情、認識（知的理解）などの発達に関わる年齢別特徴は、次のように明らかになっている。

#### 【１・２歳児—生命の尊さを知らない—】～カエルはイヤダ～

１・２歳児は、カエルを嫌がる幼児とオモチャのように扱う幼児が見られる。カエルとの関わりを拒絶する姿（いやだと逃げる、怖くて泣く、気持ち悪い）や自己中心的に関わる姿（強く握り潰す、投げる、足で踏む）から、カエルの生命の尊さについては、ほとんど理解することができない。

#### 【３歳児—生命の尊さに次第に気づく—】～カエルは自分にとって大事なもの～

３歳の幼児は、カエルを自分の遊び友達として独占したり、自分にとって大事なものとして扱う姿（自分のと言って友達と奪い合う、嬉しそうに両手で包むように持つ、毎日カエルを捕まえても遊び終わると元の場所にバイバイと手を振って返す）が見られ、カエルの生命の尊さに次第に気づいてくることが分かる。

#### 【４歳児—思いやりから生命の尊さを次第に認識する—】～カエルの生命はカエルにとって大切なもの～

４歳の幼児は、カエルを仲良し友達のように、カエルの生命はカエルにとって大切なものとして扱う姿（カエルと大喜びしながら遊んだり触れて楽しむ、カエルを撫でたりかわいいと言って友達にあげる、遊び終わると返す、カエルにハエあげると言ってハエを必死で捕まえようとする、カエルくん〇〇のせいで動かなくなってしまった、かわいそうにかわいそうに）が見られ、カエルへの思いやりから生命の尊さを次第に認識してくることが分かる。

#### 【５歳児—愛護やいたわりから生命の尊さを理解する—】～生命を守るために自然に返そう～

５歳の幼児は、大好きな掛け替えのないお友達として、カエルの生命を守ろうとする関わり（優しく持てばいいんだよとつかみ方を友達へ教える、遊び終わるとあじさいの花の下や用水路の水の所に逃がす、エサ食べてるかなと心配する、暑いからかわいそうと言って水をかけてあげる）が見られる。カエルを一生懸命世話したり優しく遊んだりすることで、カエルの成長と共に愛情が育まれ、掛け替えのない存在となり、カエルの生命を守るためには自然に返してあげようという愛護する心が培われ、カエルの生命の尊さを認識していることが分かる。

「生命の尊さ」における幼児の遊びや活動の姿について総じて言えることは、幼児の「かわいそうだから（カエルを）返してあげよう」という言葉から知れるように、「生命の大切さを感じ取る心情が育つ」ことが幼児の「生命の尊さ」の姿である。

### 〈Ⅳ〉幼児期の「生命の気づき・認識・尊さ」の縦断的特徴と保育士の働きかけ

以上の考察から、幼児の主体的な遊びや活動の姿から縦断的な発達の年齢別特徴について、「まとめる」と次の通りである。

#### （１）幼児期の「生命の気づき・認識・尊さ」の縦断的特徴

##### 【３歳児—生命に気づく—】

幼児期においては、３歳になると、例えば遊びが終わるとカエルを返してあげると言う「生命の気づき」の姿が顕著に現れる。「生命の気づき」の発達曲線を描くとすれば、成長発達が１・２歳にかけては「横ばい」の状態から「わずかな」傾きであるが、３歳は最も「大きな」傾きとなり、４歳５歳は「ゆるやか」に伸びていく発達曲線になる。

##### 【４歳児—生命を認識する—】

４歳児の「生命の認識」における縦断的特徴は、４歳になると、例えばカエルの卵を見てオタマジャクシになるんだと言うように「生命を認識する」姿が顕著に現れることである。幼児の「生命の認識」についての発達曲線は、成長発達が１・２歳にかけては「横ばい」状態から「わずかな」傾きであるが、３歳では「ゆるやかな」傾きとなり、４歳は「大きな」傾きとなって伸び、５歳になってまた「ゆるやか」に伸びてくる。

### 【5歳児—生命の尊さを理解する—】

5歳児の「生命の尊さ」における縦断的特徴は、5歳になると、例えば、「エサを食べているかな」と心配するように「生命の尊さを理解する」姿が顕著に現れることである。5歳までの「生命の尊さ」に関する発達曲線は、成長発達が1・2歳にかけては「横ばい」状態であるが、3歳では「わずかな」傾きから4歳で「ゆるやかな」傾きとなって伸び、5歳になって「大きな」傾きとなり伸びている。

これらの考察から知れるように、幼児期の生命の「気づき・認識・尊さ」の縦断的特徴を「まとめ」と、「生命に気づけない」1・2歳が、3歳になると「生命に気づく」ようになり、4歳には「生命の存在を認識できる」ようになって、5歳は「生命の尊さを分かる」ようになるのである。このように、生命の「気づき」「認識」「尊さ」の三者の関連性は、生命の「気づき」から生命の「認識」へ、生命の「認識」から生命の「尊さ」へと発展的に成長発達していることに見られる。

### (2) 生命の「気づき・認識・尊さ」の縦断的特徴と保育士の働きかけ

#### 【「生命の保育」—幼児の「自発性・自主性・主体性」への保育士の働きかけ—】

保育士の働きかけとして、生命の気づきから生命の認識へ、生命の認識から生命の尊さへと発展していくために重要なことは、幼児の自発性を刺激し、自主性を培い、主体性の育ちに働きかけることである。

①保育士による「生命の気づき」における幼児の「自発性」への働きかけとしては、幼児の心の内から湧き起こる思い（好奇心や探究心）や欲求（見たい触りたい遊びたい）を保障するために、例えば「やった一川があるぞー」と言うような自由でのびのびとした「解放感のある計画的な環境構成」（豊かな自然環境の保障）をすることである。そして保育士が、幼児の個性や感性を尊重し、感動や驚きに「ほんとだ（カエルの卵は）ゼリーみたいだね」と言って共感しながら「興味や関心を抱くような援助」をおこなうことで、幼児は生命あるものへ「Aちゃんも触りたい」と言って自発的に関わるようになるのである。その時、幼児は、現在関わっている物体がこれまでの経験の中で獲得してきた生命への自己イメージと一致すると、「あれとこれは同じなんだ」ということを発見し「生命に気づいていく」のである。

②保育士による「生命の認識」における幼児の「自主性」への働きかけとしては、幼児自身の「なぜだろう、どうしてだろう」と疑問に思う知的的好奇心による「知りたい、調べたい、試したい」という知的探求心を保障するために、自分から進んで自由に観察したり、自主的に友達同士調べ合うことができる「計画的な物的文化的環境構成」を設定することである。そして保育士が、幼児の発見や疑問に共感しながら知的的好奇心や探究心を誘発するような「応答的な援助」を行うことで、幼児は自主的に、生命に関するもの（動植物、絵本、図鑑など）へ関わるようになるのである。その結果、幼児は、継続的に生命あるものをじっくり観察したり、図鑑で調べたり、自分で試してみながら「やっぱり〇〇だったよ」と確認し、生命の成長の変化を知ったり、生態理解を次第に深めながら「生命の存在を認識していく」のである。

③保育士による「生命の尊さ」における幼児の「主体性」への働きかけとしては、幼児が生命あるものに対し、自分自身の意志や判断にもとづき愛着をもって「かわいいよ、優しくもってね」と関わる活動を保障するために、幼児が自己の思いを表出できるような「ぬくもりとつながり」のある優しい『雰囲気づくり』と言う人的環境構成を図ることである。そして保育士が、幼児の生命あるものとの関わりにおける喜びや悲しみなどに共感しながら幼児の感情を受容し、思いやりを「伝え合うような援助」を行うことで、幼児は主体的に生命あるものへ関わるようになっていくのである。その結果として幼児は、「かわいそうだから、川へ返してあげようよ」という生命の大切さを感じ取る心情も育ち、幼児自身の意志や判断にもとづいて主体的に生命あるものを自然に返すようになり、「生命の尊さを理解していく」のである。

### （３）生命の「気づき」から「認識」、そして「尊さ」へと発展するための働きかけと関わり合い

#### 【ステップするための発達理由】

生命の「気づき」から「認識」そして「尊さ」へとステップするためには、保育士や保護者からの「働きかけ」と、異年齢交流を含む集団保育の遊びや活動における幼児同士の「関わり合い」が必要であり、且つ重要である。そこで、①「気づけない」から「気づき」へ、②「気づき」から「認識」へ、③「認識」から「尊さ」へ、などの発達段階のステップの実践事例を述べておきたい。

#### 【①気づけないから気づきへ】

「１・２歳児の生命に気づけなかった幼児」が、「気づけるようになる」発達の保育活動は、カエルを踏もうとする幼児のいたずら遊びを受容しながらも、例えば「カエルさん痛い痛い言ってるよ」と言うようなカエルを擬人化して語りかける保育士の「生命への願い（カエルさんはあなたと同じで傷ついてしまう生き物だから生命あるものをむやみに傷つけないようにしようね）」を込めた「働きかけ」である。そして、異年齢交流を含む集団保育での「カエルさん踏んだらかわいそうだよ」という幼児同士の遊びにおける「生命への思い」を伝える「関わり合い」である。

#### 【②気づきから認識へ】

「生命に気づいている３歳児」が、「生命の存在を認識できるようになる」発達の保育活動は、例えば幼児の「オタマジャクシはエサ食べるの？」「いつカエルになるの？」などの疑問を受容し、「お魚さんみたいにエサ食べるんだよ」「足が出て、手が出て、しっぽが短くなったらカエルになるんだよ」と応答的に関わる「生命への願い」を込めた保育士の「働きかけ」である。そして、異年齢交流を含む集団保育における、例えば３歳児が大きい幼児のカエルとの遊びを真似て水や葉っぱをかけたり、「すごい！跳ねた」「冷たいね、やわらかいね」と言うような幼児同士の遊びの模倣からカエルの生態を知るなどの「生命への思い」を伝える「関わり合い」である。その結果として、幼児のこれまでの経験による知識の疑問が、経験や活動によって新たな知識を生み出し、生命の存在を認識できるようになるのである。

#### 【③認識から尊さへ】

「生命の存在を認識している４歳児」が、「生命の尊さを理解する」ように発達する保育活動は、オタマジャクシの生命を知りながらも遊びに夢中になって傷つけてしまう幼児に対し、「強くつかんで乱暴に触るとオタマジャクシは小さくて柔らかくて弱いから、ケガしたり死んだりするんだよね」と言う「生命への願い（生命への畏敬の念）」を込めた保育士の「働きかけ」である。そして、集団保育における幼児同士の「優しく触ってあげればいいんだよ、こうやってすくうんだよ」と言ってオタマジャクシを傷つけないような触れ合いとしての「生命への思い」を伝える「関わり合い」である。

#### 〈Ⅴ〉輝く生命の保育の創造をめざして

この保育の実践研究による成果は第一に、幼児の生命の「気づき・認識・尊さ」という縦断的な年齢別特徴が明らかになったこと、第二に、生命の「気づき」から「認識」へ、生命の「認識」から「尊さ」へと発展的に成長発達している幼児の姿が明確になったこと、第三に、「生命の保育」における保育士の働きかけとして、生命の「気づき」は幼児の「自発性」へ、生命の「認識」は幼児の「自主性」へ、生命の「尊さ」は幼児の「主体性」へと働きかけることの必要性が明示されたことである。ことに、幼児の生命の「気づき」「認識」「尊さ」へと発展するためには、「生命への願い（生命への畏敬の念）」を込めた保育士の「働きかけ」と集団保育における幼児同士の「生命への思い」を伝える「関わり合い」が重要である。「生命の保育」における今後の研究課題は、各年齢の発達段階によって、横断的な期間別特徴としての生命の「気づき・認識・尊さ」の発展的な発達過程の幼児の活動の姿も明らかにされていることから、保育士の計画的な働きかけによる横断的な期間別特徴を踏まえた、より系統的な「保育の発展的プロセス」を明らかにすることである。そのためには、飼育活動の長所を生かしてカエルとの関わりによる自然体験活動から飼育活動への保育の展開、より自然に近い飼育活

動としての自然的飼育活動と自然体験活動の融合保育についても実践研究を進めるものである。豊かな自然にある生命の尊さは、豊かな自然にある生命との関わりなしには、学ぶことができない。いかに「生命」は、美しく、たくましく、尊いものなのかを感じ認識することができるように、生命の母体となる地球の平和を愛し、人間のきらめく生命の象徴である乳幼児の豊かな未来を願い、「輝く生命の保育の創造」を目指して、今後も保育内容の充実と保育士の資質向上に努め、保育の実践研究をおし進めるものである。

## Ⅶ 幼児の「生命の気づきから尊さを育む保育」を創造するために

最後に、幼児の「生命の気づきから尊さを育む保育」を創造するために、保育実践の研究成果、遊びの発展としての課題活動、今後の研究課題などの三つの問題について簡単に触れ、本稿の「まとめ」としたい。

### 1. 保育実践の研究成果

我々の保育実践の研究成果について、最初に、幼児期における「生命の気づきから尊さを育む保育の創造」を、そして次に水島和子・吉田純子両主任保育士によるその後の継続研究の成果を、いずれも簡潔に箇条書きに「まとめ」で終りにしたい。

#### (1) 幼児期における「生命の気づきから尊さを育む保育の創造」に関わる研究成果

1) 幼児の生命の気づきから尊さを認識する、いわば「生命の認識」の発達の研究から明らかになったことは、次の横断的な「期間別特徴」と縦断的な「年齢別特徴」の二つの幼児における「生命の認識」の発達の特徴である。

①横断的な「期間別特徴」としては、一年間を通して、1期(4～5月)では「生命との出会い」、2期(6～8月)は「生命との触れ合い」、3期(9～11月)は「生命への深め合い」、そして4期(12～3月)では「生命の振り返り」の4つの順の成長発達を辿っていくこと。

②縦断的な「年齢別特徴」としては、0～2歳児では、「生命あるものへのいたずら(遊び・探索)」、3歳児は「生命の気づき」、4歳児では「生命への思いやり」、5歳児では「生命へのいたわり」、そして6歳児では「生命の尊さ」の5つの順の成長発達を辿っていくこと。

そして、保育士が考えている以上に、幼児は、自然環境の中で、主体的に関わりを持ち生命の尊さに気づいていることも明らかになっている。

2) 生命の認識に対する発達のプロセスに添った保育、つまり幼児の「生命の気づきから尊さを育む保育の創造の究明」において明らかになったことは、自然との自由な遊びや「触れ合い」からタンポポやカエルの世話などの課題活動へと展開するような保育士の働きかけが重要なことである。この自然との自由な遊びの発展としての課題活動のための計画的な環境構成と援助の重要なポイントは、次の感性、遊びの展開、知的好奇心など三つの保育士の働きかけである。

①感性の視点では、自由にのびのびと楽しみ触れ合う直接体験という環境構成に対し、例えば、カエルへのかわいいと言う思いや死を悲しんだりする幼児の個性や感性を尊重するような援助が大切であること。

②遊びの展開と言う視点では、好きな遊びをたっぷりと十分楽しむことができる「ゆとり」をもつ保育士の環境構成に対して、幼児の面白い、楽しいと言う思いから主体的にタンポポとの遊びを展開し、身近な素材として「触れ合う」ような幼児の主体的な遊びを大切にすること。

③知的好奇心の視点では、自己を表出できる温かい雰囲気づくり、そして知的好奇心を誘発するような雰囲気づくりと言う環境構成に対して、カエルと一緒に遊ぶことによって生命に気づき、世話を通して「いたわる」ような幼児との応答的な関わりを大切にすること。

## 2. 長橋保育園・津軽野保育園における保育実践の継続研究の成果

### (1) 長橋保育園の研究成果

全体としての研究成果は、幼児は1年を通して、生命との「触れ合いの保育」から「生命」に「気づき」、生命との「深め合いの保育」から「生命への愛着心」を培い、生命への「振り返りの保育」から「生命の尊さを育む」ことなど、これら三つの発達段階を経て発展的に展開していくことが明らかになったことである。

生命との「触れ合いの保育」で重要なことは、自然環境の設定という計画的な環境構成として「直接体験」を保障することである。それは、触れ合いや思いやり、知的好奇心を培っていくためには、自由に植物と関わり合い、身近に感じられるよう幼児の個性や感性を尊重した保育士の援助の必要性を意味している。生命への「深め合いの保育」に関しては、計画的な環境構成として「夢中になって遊び込み」、幼児同上や保育士と一緒に「楽しい・嬉しい」と思う「ゆとりの心」を保障することである。そして、幼児同士が深い関わりをもち、思いやりや知的探究心を培っていくためには、「これ、なあに？」の知的探究心が育まれるよう幼児の主體的な遊びを大切にする保育士の援助の重要性である。生命への「振り返りの保育」については、いつでも観察したり世話ができる自然環境の設定という計画的な環境構成において自己を表出できる温かい「雰囲気づくり」を保障することである。幼児の知的探究心や思いやりを培うには、幼児同士や保育士と共感し合い、応答的な関わりを大切にする保育士の援助が大切だからである。

### (2) 津軽野保育園の研究成果

この保育の実践研究による成果は、第一に、幼児の生命の「気づき」「認識」「尊さ」という縦断的な年齢別特徴が明らかになったことである。第二に、この三者の関連性は、生命の「気づき」から生命の「認識」へ、生命の「認識」から生命の「尊さ」へと発展的に成長発達していることに見られることである。「生命に気づけない」1・2歳児が、3歳児になると「生命に気づく」ようになり、4歳児には「生命の存在を認識できる」ようになって、5歳児は「生命の尊さを分かる」ようになるのである。第三に、「生命の保育」における保育士の働きかけとして、生命の「気づき」は幼児の「自発性」へ、生命の「認識」は幼児の「自主性」へ、生命の「尊さ」は幼児の「主体性」へと働きかけることの必要性が明示されたことである。ことに、幼児の生命の「気づき」「認識」「尊さ」へと発展するためには、「生命への願い（生命への畏敬の念）」を込めた保育士の「働きかけ」と集団保育における幼児同士の「優しく触ってあげればいいんだよ」などと言う「生命への思い」を伝える「関わり合い」が重要である。

「生命の保育」における残された研究課題は、それぞれの年齢の発達段階によって、横断的な生命の「気づき」「認識」「尊さ」の発展的な発達過程の幼児の活動の姿も明らかにされていることから、保育士の計画的な働きかけによる横断的な期間別特徴を踏まえた、より系統的な「保育の発展的プロセス」を明らかにすることである。そのためには、年間を見通し飼育活動の長所を生かしたカエルとの関わりによる自然体験活動から飼育活動への保育の展開、より自然に近い飼育活動としての自然的飼育活動と自然体験活動の融合保育についても実践研究を進めながら、「生命の気づきから認識へ、そして生命の尊さへ」という保育の創造について探究するものである。

### 3. 今後の研究課題

我々に残された研究課題については、色々考えられるが当面のそれは、次の五つの問題である。

一つは、生命の気づきから尊さを育むための自然についての認識（例えば生態理解など）が不十分であり、そのための教材研究や研修会を持つなど、保育士の質的向上を図ること。

二つ目は、生命の気づきや尊さを育む保育の視点から、3歳未満児保育・学童保育・障害児保育・異年齢交流保育や地域子育て支援などとの融合した系統性のある保育計画・指導計画は、どうあるべきか今後も探っていくこと。

三つ目は、地域性の特色の一つでもある雪の季節による生命の気づきから尊さが育まれるための保育計画・指導計画は、どうあるべきか研究を深め明らかにしていくこと。

そして四つ目は、残されたより具体的な保育研究課題としては、①幼児の発達理解と保育士の出番（役割）についての更なる幼児保育士協働型保育の研究、②生命の尊さを育む保育における家庭や地域との連携、③自然における体験活動と課題活動（栽培）を生かす保育の研究、など。

更に五つ目は、年間を見通し飼育活動の長所を生かしてカエルとの関わりによる自然体験活動から飼育活動への保育の展開、より自然に近い飼育活動としての自然的飼育活動と自然体験活動の融合保育についても実践研究を進めながら、「生命の気づきから認識へ、そして生命の尊さへ」という保育の創造について探究すること、などである。

そして、子ども（幼児）も親も保育士も共に育ち合い、生命の尊厳から平和を愛する人間となることを願い、笑顔溢れる未来が構築されるように、これからも保育園保育の質の向上に努めていきたいと思っている。

## 参考・引用文献

1. 青森県五所川原市保育連合会「生命の気づきから尊さを育む保育の創造」（平成15年度第47回全国保育研究大会発表資料）
2. 野口伐名・細井房明・木村吉彦『保育の本質と計画』学術図書出版社
3. 野口伐名・手島信雅他『保育原理—実践的幼児教育論—（第2版）』建帛社
4. 野口伐名『野口伐名幼児教育論集—未来に向けての保育ビジョン—』青森中央学院大学教育学研究室
5. 野口伐名『野口伐名子育て支援・保育・教育・福祉論集—子育てに必要な優しい地域作りのために—』青森中央学院大学教育学研究室
6. 青森県保育連合会「広報あすなろの友（No.27）—たくましく生きる力を育む保育のひろがり求めて—」
7. 青森県保育連合会「広報あすなろの友（No.29）—一人一人の感性の社会化を促す保育の創造—」
8. 青森県五所川原市保育連合会『たくましく生きる力を育む—アンケート集計結果報告集—』

※ 上記の参考・引用文献の他にも、この小論を作成するに当たり、多くの先学の優れた研究成果を拝借し援用させていただいたことを深く感謝申し上げます。